

2025年6月1日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教39「事柄の本質」

イザヤ42：1～4、ヨハネ7：10～24

「うわべだけで裁くのをやめ、正しい裁きをしなさい」（24節）とあります。「うわべ」（オプシス）は外観、見た目ということです。わたしたちは見た目、表面的なことしか見えていないのです。ほんの一部しか見えていないのに、それですべてを分かっているかのように考えていることがあります。この世界も、自然も、実は部分的にしか見えていません。本当は知らないことがたくさんあるのです。人に対してもそうでしょう。相手をほとんど知らないのに、思い込みや誰かの噂や評判だけで判断していることがあります。でも実際に会って話してみると全く違う印象を持っていたことに気づかされることがあります。人間同士の関係でもそうなのですから、まして神さまに対してわたしたちは知らないことだらけではないでしょうか。

人々は、イエスさまをうわべだけ、人間的な部分だけを見て評価しています。「群衆の間では、イエスのことがいろいろとささやかれていた。『良い人だ』と言う者もいれば、『いや、群衆を惑わしている』と言う者もいた」（12節）評価が分かれています。「良い人」「惑わしている」これは好き嫌いというような程度です。確信を持って言っているのではない。わたしたちも人に対して好き嫌いで接しているなら、それはその人に対して失礼なことでしょう。わたしたちは神さまに対してもそういう浅い付き合い方しかできないのです。そういう浅いところで留まってしまふ、それで満足しているのかもしれない。

以前、加藤常明先生が金沢で伝道していた時に、ある学生が教会に来ていたそうです。金沢は浄土真宗の盛んな土地で、家の人から「キリスト教は悪い宗教ではないが、洗礼は受けるな、深入りするな」と釘を刺されていたという話をされていました。広く浅く、良いところだけをつまみ食いする。自分にとって都合が良いか、悪いか。希望の学校に入るために教会に来るといふこともあります。どこまでも自分中心なのです。神さまに対して、人に対してもわたしたちはそういう付き合い方しかできなくなるのです。

ユダヤ人たちは「この人は、学問をしたわけでもないのに、どうして聖書をこんなによく知っているのだろう」（15節）と言います。これは今の言い方では、「学歴もないのに」ということです。これは相手を蔑んだ言い方です。このユダヤ人がファリサイ派や律法学者であると考えますと、彼らは特別な教育を受けています。ラビという律法の専門家について勉強した。「わたしはあのラビの門下です」そこに彼らのステータスのようなものがありました。その自分を基準にして、そのフィルターにかけて人を評価する。そのようにわたしたちは自分が基準となつて、そこからしか人を見ることができない。それがうわべだけの評価につながっています。20節の「あなたは悪霊にとりつかれている」というところも同じでしょう。「あの人は変だ」「頭がおかしい」そういう人を蔑んだ表現です。

そしてそういう人間的なうわべだけの評価にいつも晒されているゆえに、自由にものが言えないという現実があります。「しかし、ユダヤ人たちを恐れて、イエスについて公然と語る者はいなかった」（13節）ユダヤ人という権威があるのです。その人間的な権威の前に萎縮し、自己防衛しています。「公然と」（パッレーシア）は、率直にとか大胆にという意味です。公然と、大胆に語ることはできない。人を恐れて、人の評価を恐れて率直にものが言えない。心から、

腹を割って話しができない。わたしたちが生きているこの社会もそういうところがあるのではないのでしょうか。本当の自分を出したら嫌われる。だから本音が言えない。自分を押し殺したところでの表面的な付き合いに留まってしまう。それはちっとも自由ではないし、そこに生きづらさを感じている人は多いと思います。

そういう生きづらさを抱えているわたしたちのところにイエスさまは来てくださいました。うわべだけの付き合い、表面的な評価、そこに留まろうとするわたしたちの殻を打ち破り、その内面にまで深く関係を掘り下げる。それがイエスさまの関わり方ですし、そのようにしてイエスさまは本気でわたしたちと向き合ってくださいます。それが徹底されたところがイエスさまの受肉であり十字架の死です。福音書の冒頭にある御言葉「言は肉となつてわたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子として栄光であつて、恵みと真理とに満ちていた」(1:14) この栄光は独り子イエスさまに現されました。まことの人となられ、最後は十字架で死なれる。神さまはそこにご自身の栄光を現されました。そこでわたしたちと深く出会ってくださいますのです。

生きていれば辛いことや悲しいことがたくさんあります。病を得て、年老いて、それこそ神も仏もない。そういう心境になることもある。でもイエスさまはそういうわたしたちの苦しみ悩みの一番深いところに来られました。それが十字架です。十字架において出会われるのは、神さまの出会い方が表面的なものではないことを示しています。一番苦しいときに、辛いときに、共にいてくださる。そこでこそ出会ってくださいます。それが神さまの出会い方であり、愛なのです。その愛のゆえに独り子を与え、すべてを捧げてくださった。全身全霊で愛してくださいました。そのように愛されたわたしたちもまたそのように人を愛することができる。人と真実に出会うことができる。

当たり障りのない関係、誰も責任を負わないそういう関係性しか築けないわたしたちです。コロナ以降、その傾向は強まったように思います。そこに人間の罪の本質が現れているように感じます。けれども神さまはどこまでも深くその関係を持つてくださる。最後はわたしたちの罪の責任を全部背負って十字架で死んでくださいました。このイエスさまとの出会いがわたしたちの生き方を根本から変えるでしょう。

天の父よ。表面的な関係しか築けないわたしたちです。だからこそ、あなたは独り子をわたしたちの一番深いところ、罪の中にまで遣わしてくださいました。そして十字架で死んでくださいました。自分でも気づかないわたしたちの隠れた罪もすべて受け入れその責任を負ってくださいました。それほどに愛してくださいましたことを感謝します。その救いのゆえにわたしたちも隣人に寄り添い、深く出会うことができますように。主の御名によって祈ります。アーメン。